九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

西欧中世における反イスラーム論 : 極めて困難な相互理解 : ラモン・マルティの事例を中心に(下) ジュゼップ・エルナンド(バルセロナ大学)著

阿部, 俊大
九州大学大学院言語文化研究院 : 准教授

https://doi.org/10.15017/1546598

出版情報：言語文化論究. 35, pp.123-129, 2015-11-24. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

西欧中世における反イスラーム論：

極めて困難な相互理解――ラモン・マルティの事例を中心に（下）

ジュゼップ・エルナンド（バルセロナ大学）著

Josep Hernando, “La polèmica antiislàmica i la quasi impossibilitat d’ una entesa”, *Anuario de Estudios Medievales*, 38-2 (2008), pp. 763-791.

阿　部　俊　大　訳

５．『使徒信経要綱』

イスラーム教徒による、キリスト教についての議論の前提は、「キリスト教は破綻している宗教である。なぜなら聖典であるところの聖書が偽りの書であるから」というものである[79]。そのため、ラモン・マルティは、ムハンマドの預言者としての召命が偽りであるのに対し、旧約・新約両聖書は偽りのものでないという様々な論拠を示して彼の作品を結んでいる。「しかし、もし、我々が語ったことに示されている真実に同意しようと望むようないずれかのサラセン人が、旧約・新約両聖書が歪められ、修正されたと主張するのであれば、我々は、理性と権威と古き物語によって、明らかなやり方で、神がその作者であるのだから、聖霊から発したこの書物は、その起源から完全性と不変性を維持していて、歪められてはいないと示そう。それを証明できれば、彼らも証明されたものを信じ、認めざるを得まい」[80]。

旧約聖書には、神によるその内容の改変・短縮や加筆の禁止がはっきりと記されている。新約聖書においてイエスは、彼は律法を変えるために来たのではなく、それを完成するために来たのだと明言している。歴史は、聖書の書物の改変や偽造が不可能であると示している。証拠として、〔※プトレマイオス朝エジプトの〕プトレマイオス２世フィラデルフォス（前285－前247年）の役人であったアリステアスの、72人（略して「70」とされる）の翻訳者による旧約聖書のギリシア語版〔※七十人訳聖書〕の起源についての手紙がある。そこでは、同書が分担して翻訳され、完全に保証された、唯一の訳が示されているとされている。キリスト教徒たちも、出自や出身地が大変多様であり、福音書を改変するために集まることは出来なかっただろう。ユダヤ人とキリスト教徒の間の競合関係――特に聖典についての――は、聖書の改変を不可能にした。なぜなら、必ずやもう一方がそのことを非難したであろうから。

律法や福音書が破綻していないことは、コーランを通じても証明可能である。ムハンマドは、彼の人格についての真実が見出される、ユダヤ人とキリスト教徒の召命を含むそれらの書物の内容を読むようにと言っている。律法は神の審判を語っている。ムハンマドは律法や福音書は神の記憶であり、神の言葉であると言っている。サラセン人たちは、律法や預言者たち、福音書を信じるよう命じられているのである[81]。

聖書からはムハンマドの名前が削除されており、それこそ聖書が破綻し、改変されていることを

示していると主張する者には、それはまったく正しくないと答えられる。それはイスラームの嘘や誤りを擁護するために作られた言い訳に過ぎない。預言者ハバククの書において預言されているという人もいるが、そこではある聖人について話されているのであり、聖人でもない穢れたムハンマドについて話しているのではない。福音書においてイエスがムハンマドについて話しているという者もいる。イエスが使徒たちに弁護者 paracletus を送ると約束しているのがそれだというのだが（「ヨハネの福音書」14章16節、26節）、約束された弁護者は、イエスから使徒たちに、ムハンマドが来たのではない時に送られている。弁護者とは聖霊のことである。

聖書の書物の真実性と真正性が証明されたので、それが含む信仰、すなわちキリスト教の信条についての説明に移らねばなるまい。それは『使徒信経要綱』というタイトルを持つ、使徒たちの信経の説明を通じて行われる。当時の伝統に従って、それぞれに一つの章があてられている[82]。構成は、神学作品に特徴的なものである。それにも拘らず、神学の要約や神学の論考、或いはまた護教論の作品のようになることも可能であっただろうが、実際にはそれはイスラーム教圏での伝道者たちが使用するためのマニュアルとなっている。そこには、転向の可能性がある者に説教するよう書かれている。しかし、まさにそのためにそれは論争的な神学論考なのである。なぜなら、先述の作品『ムハンマドの宗派について』の補遺もしくは第二部として、可能であれば常に、ムハンマドの信仰への反論を示しているのである。ラモン・マルティは、ムハンマドの信者たちと会い、コンタクトを持つ説教師たちに、彼らの議論を退け、その誤りを排すために、異教徒やイスラームの哲学を含むあらゆる種類の権威を用いて理論武装するように書いている。ラモン・マルティは、『使徒信経要綱』のそれぞれの章において、信条の内容から論を起こしているが、その後に、理性的な手段による当該信条の内容の証明が続いている[83]。この方法は、伝道者たちが説教しなければならない環境、すなわち、イスラーム圏の環境に当てはまっている[84]。

ある程度まで、イスラーム教徒たちへの説教はシンプルな問題であり、達成が簡単なように見える。多くの説教者たちにとってイスラームは、人間の理性を越えた超自然的な神秘の衣を脱がされ、単純化されたキリスト教のように見える。もう一つの宗教というより、多くの人にとってはキリスト教の異端であり、或いはアーリアニズムと反三位一体主義とが混合した宗派である。そのため、三位一体や、キリストの受肉、キリストの埋葬といったことを除いて、残りの教義は、大まかに言って、イスラーム教と類似している[85]。先述のように、このような、まず信仰もしくは啓示、次に理性という方法を加えるなら、説教師たちや伝道者たちには、改宗活動における成功は達成可能であるように見えたであろう。そしてラモン・マルティは、インスピレーションを得て、このような目的に適したテクストを用意することが出来た人物なのである。

信経の最初の章は、唯一の神への信仰である。その存在を証明する必要はない。なぜならイスラーム教徒の対話者はそれを当然のこととしており、神の唯一性はキリスト教徒とイスラーム教徒の間で共通の前提だからである。しかし、神ではなく、偶像を崇拝する人々の誤りは否定せねばならない。このことについて、キリスト教徒が神であるかのように図像を崇拝していると非難する、ムハンマド信者たちの非難と誤りに答えよう。キリスト教徒は図像を崇拝しているのではない。尊重しているのである。神の存在の唯一性を示したのなら、三位一体の神秘の説明に移り、きちんと理解させねばならない。作者はこのことを、この信仰が示す権威 —— この権威についての誤った解釈を「アラブ人の書物において用いられている習慣」といった言葉で仄めかしつつ[86] —— を通じて、また、コーランにおいても行われているように、理性と比較を通じて行っている[87]。

第二章は、我らの主、神の唯一の息子であるイエスへの信仰を表明している。すなわち、神は一人の子を持ち、キリストは神であり、神の子はただ一人である。すなわち、一人子は父によって永

遠性から生み出された神の自然の子であり、キリストは創造の権利と贖罪の権利によって我々の主であり、人性をも有することによって我々の主人である[88]。従って、キリスト教徒が神の完全な唯一性に反対していると信じているイスラーム教徒たちが言うような、唯一神の協力者ではない[89]。

続いて第三章では、キリストが聖霊の働きによって受胎され、処女マリアによって生まれ、預言者たちや何人かの賢者、神託者たちによって預言されていたことが述べられる。神が人性を有することがいかに有益であるかが論理的に示される。神の受肉を示す証の一つが、奇跡を行ったという事実である。コーランもキリストの奇跡について述べ（3章49)、彼が奇跡を行ったことを確認している[90]。人々がそれに向かって巡礼を行うべき神の家の山、すなわち ── メッカではなく ── イェルサレムに向かって移動することも、それもまた、偶像を信じていた人々の神への改宗の印である。

第四章では、キリストの御業の一つである、埋葬が主として扱われる。キリストは、原罪のために魂の死を迎えねばならない人間を、罪と悪魔の力から解放し、それに永遠の命を与えるため、ポンティオ・ピラトの下で苦しみ、十字架に掛けられ、死に、埋葬された。受肉は贖罪につながるのである。イスラーム信者の救済におけるムハンマドの役割を仄めかしつつ、神のよって行われた以外の人間の贖罪の可能性は否定される。彼が十字架にかけられたのは、使徒や弟子たちだけではなく、ユダヤ人や心優しき人々も目にしたことである。我々はこれらの証人たちを信じるべきである。600年も後に現れて、その場に居合わせず、起こったことを何も見ていないで、「キリストは十字架にかけられたのではなく、他の者が彼の身代わりになったのだ」などと言ったり書いたりするムハンマドではなく（『コーラン』4章157)[91]。彼が埋葬されたことは明言されている。彼の墓はイェルサレムにある。イスラーム教徒たちも尊重し、キリスト教徒たち自身は、あらゆる場所から巡礼に来る場所である。

第五章において、地獄を乗り越え、3日目に復活したことが述べられた後、第六章に入る。彼は天に昇り、父なる神の右に座った。彼は日中に天に昇り、多くの人がそれを見ていた。同じく天に昇ったと自慢しているが、夜で誰もそれを見ていなかったムハンマドなどとは異なっている。『ムハンマドの宗派について』で既に述べたように、イスラーム信者たちが真実だと深く信じる、ムハンマドが行ったとされる奇跡の一つについて、このような言及が為される。*Miray*、すなわち昇天と呼ばれるムハンマドの天への上昇は、反イスラーム論者たち、とくにラモン・マルティから、断固としたやり方で否定されている[92]。第七章では、生者と死者への審判が行われること、ムハンマドの仲裁 ── 彼は自分の仲裁によってすべてのイスラーム信者は救済されると装っている ── は何の役にも立たないことが述べられる（『コーラン』9章103)[93]。

『信経』の第八章は、三位一体の第三のペルソナである、聖霊について語られる。三位一体について語る際に既に述べられたように、それは父と子と共に唯一の神である。続いて第九章では、キリスト教信者、すなわち洗礼をうけた者たちの世界的な共同体である、神聖なるカトリック教会に対する信仰が語られる。同様に第十章では、秘蹟によって、また聖霊の恵みと良き行いによって行われる、聖体拝領への信仰が語られる。告解の秘蹟はガザーリー（1058－1111）の権威によって、彼の著作『告解について』で保証されている。そこでは、人は他の人間、この場合は聖職者に、告白を行わなければならないと書かれている。聖職者は隠匿された事柄の裁き手であり、誰も自らの罪を告白するのを恐れないように、死によって罰するのではなく、告解を課している。これは、自発的に彼に対して姦淫の罪を告白した者に石打ちの刑を科したムハンマドの行為とは、大きく異なっている[94]。既に論考『ムハンマドの宗派について』で目にしたように、キリスト教のモラルとイスラーム教のモラルの比較を可能にするもう一つの秘蹟は、婚姻の秘蹟である。しかしここでは、同じ議論の基礎に基づいているにも関わらず、一夫一婦制、目的としての生殖 ── 快楽ではなく ──、

蓄妾の否定、離縁や離婚の法の否定 ── それは解消不能であるから ── など、より広い領域が語られている[95]。

第十一章は、肉体の復活への信仰を記す。復活は、魂と肉体の新たな結合である。全ての復活した人間は、もはや死ぬことが無いので、不壊で不死である。良き人は栄光を与えられ肉体に対してもそうである。この栄光は四重のものである。光に満ち、自在に移動し、頑健で鋭敏である。栄光を与えられた肉体は、食事を必要としない。これは当然、ムハンマドの天国についての法螺話を打ち消すものである。その上、コーランが語る完全に物質的な天国のヴィジョンは、イスラーム教徒の賢者たちを、肉体の復活を信じないという誤りに導いたものである[96]。そして最後に第十二章は、快楽ではなく神の知識と愛に基づく、永遠の命への信仰である。このことはサラセン人の哲学者たちも述べている。肉体的な快楽（ムハンマドがコーランの４章122－124、36章49－59、37章40－49、55章46－78で言っているような、食べること・飲むこと・女性）に対する精神的で神聖な快楽の優越と、両者の比較は、イブン・スィーナー（980－1037）が『神の本質について』、またガザーリーが『哲学者の意図』や『宗教諸学の再興』において書いている。アル・ファーラービー（870－950）も『自然の傾聴について』と『知性に関する書簡』において同じことを表明している。

６．結　論

ムハンマドを彼らの預言者と、コーランを彼らの聖典と、イスラーム教を彼らの宗教と認めることで、イスラーム教徒たちは救いようのない誤りに陥っている。神へ通じる道を実践する代わりに、彼らは道に迷い、瀆神と偶像崇拝の道に引き寄せられている。瀆神という言葉には、多くの論争家たちのパッションと敵意が込められている。イスラームに対する個人的態度のみならず、一般的に反イスラーム論の全ての態度によって特徴づけられる言葉である。ほとんどいつでも、キリスト教の真実に敵対する宗教の誤りや、その成功がキリスト教を侮蔑し、脅かすような政治的敵対者を前にしては、寛容さは脇に押しやられる。

彼らのイスラームについての批判的検討において、論争家たちは、具現化した党派心によって生じる、大変に否定的な態度を取っている。彼らはムハンマドの中に、彼がモラルにおける怪物や悪魔のような詐欺師であると明示するものを探し求める。彼には一切の美徳や、賞賛に値するものを認めない。彼の宗教が良き要素を含んでいると証明する努力をする者でさえも、彼によって利用された資料にその功績を帰そうとする。預言者の導きにおける美質であると見えるものについては、それを不実な偽りというレベルに貶める。彼の一神教信仰ですら、多くの者にとっては人を騙すための戦術なのである。

預言者の人格は容赦のない批判の網に晒されるが、コーランもまた、同様に容赦のない熱意によって検討される。ある場合（ラモン・リュイ）には、コーランはつまらなさ・おとぎ話・おろかさの集合体と見なされる。聖書からの引用は、しばしばデフォルメされた偽りの形で示される。ムハンマドが受けた預言者としての啓示が真実であると証明するどころか、コーランの内容は読み手に「預言者」に対する武器を与える。このような、内容に堅実さがなく、粗雑な誤りで満ちた書物が、神に由来するはずがない。要するに、それはムハンマド自身が生み出したものなのである。いずれにせよ、悪魔の啓示を受けたものである。

イスラームは、それゆえ、信者たちに提供する理性的な事柄を何も持っていない。その道徳は、創設者の粗野な情熱を反映している。イスラームは人類の宗教の歴史における進歩を構成してはいない。むしろ後退である。その教義は恥ずかしい幻想、迷信、そして神についての大きな誤りであ

るあやふやな一神教で満ちている。

このように語られた後、その原因が裁かれる。論争家たちの非妥協性は、正当化しうる批判の範疇を越えている。ほとんどの作者はイスラーム教とコーランをよく知っているが、その熱狂性のために、いつも否定の道へと行き過ぎる。頑固で表層的な批判は、何人かの作者たちに関しては、論争家たちにが「儀礼的な慣行を別にして、イスラームが深い神への信仰と服従 —— 全ての真正な宗教的感情の本質に属する美徳 —— を語っていること」に気が付くのを妨げている。コーランの内容と聖書の内容を比べる際にも、同じことを言わねばならない。これら2つの書物の間の否定できない相違は、反イスラームの論争家たちに、神の真実の言葉に反する啓示だという判決を下すことを可能にしている。このため、良い部分もあるコーランの全ての内容に、つまらないおとぎ話であるという烙印が押される。疑いなく、論争家たちがそれをしたのである。コーランの編纂に際して使われた文章のジャンルには、まったく疑問が呈されていない。ユダヤ教やキリスト教の疑わしい説教の文章を、コーランにおいて目にするのと同様の、幻想や自由な改変が作用した結果と見なすことも可能であるということを忘れているのである。

イスラーム教とキリスト教の非両立性の名において —— もちろん、疑いなく、キリスト教が真実であるということは疑義を挟まれない —— 彼らはイスラームの教説を攻撃する。このように、我々が目にすることが出来たように、論争家たちが両者の間に築いた並行性は明らかである。このような基本的態度を取ることで、論争家たちは、変質的で、凶暴で、ひどく突き放したやり方で、イスラーム教に批判を向けるようになる。さらに、彼らは（相手側の著作を）参照することをやめ、すなわち、よりポジティヴな活動を行うのを怠るようになる。自由意志の問題や、アナロジーに依拠する神についての哲学的考察といった、わずかな例外を除いて、論争家たちは、真の教説を認識するためにすべきであったようには、イスラーム神学の内容の正しく有効な要素を提示しようと意図するようなことは無かったのである。

論争家たちは、大袈裟なやり方で、イスラーム教を打ち倒す可能性のある証拠を集めるのに専念していた。イスラームから全ての宗教的な価値を剥ぎ取り、その深い精神を貶め、要するに、彼らの議論は、無益な労働ないし道に過ぎないと断じたのである。全ての宗教的論争は、成功を収めるためには、対話を、すなわち、共同の努力に基づく、共通した真実の追求を行う必要があることを、念頭に置かねばなるまい。このような統合的な真実の追求は、相手の教説を完全に打破した後に再建しようとするのではなく、それぞれの教説に含まれる部分的な真実から出発しなければならない。

論争の無益さを確信して、キリスト教徒たちは、このような論争は、イスラーム教とキリスト教の間の対話を構築することに成功しなかったという考察に至った。その一方、イスラーム教徒たちには、この論争は議論というよりも侮辱の応酬と見えたに違いない。イスラーム教徒たちは、如何にしても、この論争に彼らの真の教説や彼らの宗教的精神の概念を認めることは出来なかった。2つの対照的な神学的態度が、どのような異なる環境の中にあるのかに気付くには、多様な論点についてのイスラーム教神学の表明とキリスト教の攻撃を比較することで十分である。

結びにあたって、先に述べたように、既にペトルス・ウェネラビリスが、著述によってコーランを論駁する必要があると考えていたこと、しかし同時に、キリスト教徒の側には、如何なる種類のものであれ、思想的な交流を行うことに問題はないが、サラセン人たちには討論は不可能であること —— なぜならそれは禁じられているから —— と見做していたことを想起されたい。しかし、それはイスラーム教とキリスト教の関係というテーマの別の側面であろう。

注

79 イスラーム教徒の著作家たちは、コーランにおける *tharif* という言葉について、多様な見解を示している。タバリー（839－923）などの作者は、誤った解釈、聖書のテクストの意味の偽造という意味で捉えている。他の者たちはそれを、多様な目的を伴うテクストの改変と捉えている。例えばイブン・ハズム・デ・コルドバがそうである。I. di Matteo, “Il Tahrif od alterazione della bibbia secondo i musulmani”, *Bessarione*, 38 (1922), pp. 64-111. を参照。アル・ブハーリーの『真正集』もこの点について次のように述べている。「神は我々に、啓典の民は、彼ら自身の手で神に由来しない事柄をもたらすにあたって、神の書物の一部を修正ないし改変した、と知らせた」。M. Fierro, *La polémica islámica anticristiana*, cit., pp. 106-107. を参照。

80 *De Secta Machometi*, pp. 53-63.

81 第二章「牝牛」、第五章「食卓」、第十章「ユーヌス」、第十五章「アル・ヒジュル」。

82 以降、この作品を『使徒信経要綱』というタイトルと、以下の版に基づいてテクストが掲載されているページを引用する。J. M. March, “En Ramon Martí i la seva *“Explanatio Simboli Apostolorum”*, *Anuari de l’ institut d’ Estudis Catalans*, 1908, p.481.

83 ラモン・マルティは、このようにして、自身がアウグスティヌスの伝統に連なる者であることを示している。信仰から出発し、理性を通じたその証明の可能性を探す。これが彼の作品の第一の段階を特徴づけている。対話の相手は ── 他の者では有り得ないが ── イスラーム教徒である。第二の段階では、彼がユダヤ人に宛てて書いたものに特徴的に、理性の自律性を信じる姿勢 ── 信仰への服従を妨げるものではない ── において、彼がトマス主義の信奉者であることが見て取れる。語り掛ける相手が変わっていることを踏まえれば、方向性の変化には何の不思議もない。E. Vilanova, *Història de la teologia Cristiana. Dels orìgens als segle XV*, Barcelona, Editorial Herder, 1984, pp. 649-654. を参照されたい。

84 ラモン・マルティは、この方法によって、イスラーム圏の環境を知っていることを示している。例えば、古典的イスラームにあっては、法と宗教の間の区別は存在しない。神は命じ、禁止する。信徒は従い、服従する。従ってイスラームには、世俗の立法者の余地は無い。神が立法者であり、そのため、理性の作品である、人間によるポジティヴな法は無い。人間によるポジティヴな法は、神の法についての解釈にしか過ぎない。それは信仰と理性の間に常に現れる問題である。

85 M. Asín Palacios, *Un aspect inexplorado de los orígenes de la teología escolástica*, Melanges Mandonnet, Paris, 1930, II, p. 58; L. Gardet-M. M. Anawati, *Introduction à la Théologie musulmanee. Essai de Théologie comparée*, Paris, Lib. J. Vrin, 1948. を参照。

86 “Cum vero dicitur *ad ymaginem* et *similitudinem* noscitur unitas essentie divine. Quod si aliquis dixerit, quod non dixit *faciamus* et *nostram* ad insinuationem trinitatis, sed magnificentie sui ipsius, sicut est consuetudo usitata in libiris arabicis, respondeo quod enuntiatio unius de se ipso in numero plurali, secundum modum significandi se, contigitur semper in ostentation et glorificatione…”, *Explanatio Simboli Apostolorum*, p. 458.

87 “Et in Alcorano, in quo Deus loquens, secundum credulitatem sarracenorum, inducit similitudines hominibus ut ipsum intelligent. Unde dicit in c. *Luminis*, quod Deus est lumen celorum et terre, et similitude luminis eius sicut lampas olei incense lumine. Et subiungit dicens: Inducit Deus exempla hominibus (*Alc*. 24, 35). Item in c. *Abraam*: Dicit Deus, secundum credulitatem eorum. Inducit Deus

hominibus ad hoc, ut recondentur (*Alc.* 14, 25). Et modus loquendi per similitudines est multum usitatum in Alcorano", *Explanatio Simboli Apostolorum*, p. 456.

88 *Explanatio Simboli Apostolorum*, pp. 465-469.

89 『コーラン』 2章165、 6章79、13章16、31章13。

90 "Et quia validius est est argumentum ab hoste sumptum, hoc idem testator *Alcoranus* ubi loquitur de miraculis Christi", *Explanatio Simboli Apostolorum*, p. 473.

91 "Unde quidam iudeus sic opponebat sarraceno: si aliquis percutit alium multis presentibus, et percussus conqueritur coram iudice, et percutiens confitetur se percusisse, et presentes testificantur se vidisse, et alius superveniens, qui tunc presens non erat, dementitur omnes, dicens eos falsum dixisse, cui credendum est? Repondit sarracenus: Percusso et percutienti et testibus presentibus. Et iudeus intulit: Nos confitemur quod priores nostri occiderunt Christum, quem credunt christiani, et christiani, qui acceperunt fidem eius, confitentur hoc idem, et Machometus post DC annos veniens, qui presens non fuit, nec aliquid de re gesta vidit, ausus est dicere et scribere quod non fuit crucifixus…ipse Ihesus Christus fuit crucifixus, non alius pro eo, ut dicunt sarraceni", *Explanatio Simboli Apostolorum*, p. 476.

92 "Ascendit itaque Dominus de die, multis videntibus, non sicut Machometus, qui iactavit se ad celos ascendisse, de nocte et nullo vidente", *Explanatio Simboli Apostolorum*, p. 481.

93 "Et sic nichil proderit intercession Machometi, qui finxit quod per suam intercessionem omnes sarraceni salvarentur", *Explanatio Simboli Apostolorum*, p. 482.

94 "Et quia nemo libenter confitetur illi, quem scit punier ad mortem, ut ait Philosophus, ideo statutum est ut iudex occultorum non puniat morte, sed iniuctione penitentie, ne aliquis timear peccatum suum confiteri. Unde sicut dicitur in libro dicto *Albuchari* et in libro dicto *Muzlim*, quia Machometus fecit lapidary voluntarie confitentes sibi se peccantes in fornication, avertit sarracenos a confessione", *Explanatio Simboli Apostolorum*, p. 487.

95 *Explanatio Simboli Apostolorum*, pp. 488-491.

96 "Et ita adnichilatur fabula paradisi Machometi. Quod etiam ratione potest probari…Quoniam vero aliqui sapientes sarracenorum negant resurrectionem corporum, ponentes beatitudinem hominis tantum in anima, necesse est ut eius veritas rationibus ostendatur…Quod autem in errorem induxit sapientes sarracenorum ut non crederent resurrectionem corporum videtur processisse ex *Alcorano*, quum ibi contineatur quod post resurrectionem habebunt delectations corporals, ut delectation cibi, potus et coitus, que in veritate, si in alia vita essent, intellectum a cogitatione et dilectione summi boni impedirent. Unde, quia visum est eis hoc esse inconveniens, sicut est in veritate, negaverunt corporum resurrectionem, ponentes tamen beatitudinem hominis in anima, non intelligentes quod corpus humanum posset vivere sine cibo cum, ut supra tactum est, cum efficietur impassibile et inmortale, non indigebit alimonia", *Explanatio Simboli Apostolorum*, pp. 492-493.